

「グローバル人材」育成プログラムの現状と今後の課題

～現役国際人へのインタビュー調査から～

環境人間学部 国際教養コース

B3 ◎ かなたに 金谷 わか 和香、かまだ 鎌田 なな 那奈、たけの 竹野 あさみ 朝美 教授 てらにし 寺西 まさゆき 雅之

キーワード

グローバル人材、国際人としての教養、オーラル・ヒストリー、金融、英語教育、大学教育の拡充

研究概要

技術革新とグローバル化が加速する現代社会において、社会の変化に迅速に対応し、グローバル社会で主体的に活躍できる「国際人」の育成は喫緊の課題である。このような社会全体からの要請に応えるべく、日本の大学においては、「国際」、「グローバル」と名のつく学部・学科・コース・プログラムが新たにスタートし、また、英語母語話者や英語圏で学位を取得した教員による「英語で学ぶ」授業が開設されている。兵庫県立大学においても、サセックス大学、ハワイ大学、カーティン大学等の様々な留学プログラムが実施され、「グローバルユニット」という学部横断型のプログラムがスタートした。そこで、本研究は、「グローバル企業」で働く現役社会人や、長期の留学経験を持つ教員・学生にインタビューを実施し、その分析結果より、「グローバル人材」、「国際人」の再定義化を試みる。さらに今後の日本社会を担う次世代の人材を育成するために最適と思われる大学教育について考察し、具体的な提言を行う。

アピールポイント

本研究は、「グローバル化への対応」という課題に、オーラル・ヒストリーという研究手法を用いている点が最大の特徴です。オーラル・ヒストリーとは、元来歴史研究において用いられてきた手法で、アンケート調査等では見逃されてしまう極めて個性的な体験や些細な情報が秘める重要性を導き出すことを目的としています。この手法は、歴史分野にとどまらず、医療、健康科学、心理、教育など様々な分野に援用され、最近では人気テレビドラマで弁護士が用いる手法としても話題になっています。御厨（2002: 5）はオーラル・ヒストリーを「公人の、専門家による、万人のための口述記録」と表しています。「その分野に精通した人からの情報は、専門家ではない 1,000 人の研究よりもより説得力のある情報が得られる」（Nasu 2015）という考え方からも分かるように、グローバル化に関して研究するのであれば、実際にグローバル化を肌身で感じた人から話を聴くことが最善の方法と思われます。

インタビュー協力者は、大手の国際金融企業に勤務する社会人、同企業への就職を決めた学生、英語圏の大学で修士・博士の学位を取得した研究者、そして、現在就職活動を行っている学生です。本研究ではまず、一般にグローバル人材と言われる人物に求められている能力、スキルに関して、政府や文部科学省のホームページ、経営者、評論家等によって書かれた文書を精査してまとめています。このような先行研究や巷での印象と、インタビュー内容との比較により、「グローバル人育成」の理想像を明らかにします。

参考文献

御厨 貴（2002）『オーラル・ヒストリー：現代史のための口述記録』中央新書

Nasu, M. (2015) The role of literature in foreign language learning. In M. Teranishi et al. (eds.) *Literature and Language Learning in the EFL Classroom*. Basingstoke: Palgrave Macmillan. 229-247.